自句自解十句（三十）

東北大鬼城句会　　奥山　游悦

1　干潟見て津波を思ふ齢かな

三・一一の直前に『櫻草』に投稿した句。宮城県の浜の干潟で遊ぶ孫らを見て、大干潟の直後は津波が来るとの昔話を思い出し、老齢化した身を恥じた。投稿直後にあの浜や郷里の石巻に巨大津波が押し寄せたのである。

2　遠泳や大海原に無一物

少年時代に友人と郷里の海を遠泳したことがある。周囲に誰もおらず、全くの無一物。頼るは自分一人だけ。

3　枕木に海の匂ひや月見草

東北の旅。線路脇の空地に積み重ねてある枕木から潮の香りがした。近くの丘に月見草がひっそり咲いていた。

4　忘却を憎むてふ人原爆忌

平成二十六年、長崎原爆資料館で背中が真っ赤に焼けただれた郵便配達夫の谷口少年の画像を見た。生き延びた谷口さんは、国連で原爆の悲惨さを訴え、「私は忘却を怖れます」と述べた。

5　街薄暑抜けて隅田の川下り

浅草から隅田川の川下りの水上バス遊覧は、四季折々の眺めが良く、東京の歴史も分かる。「街薄暑」のときは涼しくて最高。

6　青野なす美瑛の丘の一樹かな

北海道のほぼ真ん中に位置する美瑛町。幾重にも連なる畑や丘の風景はまるで絵画のよう。そこに立つ一本の木は、厳しい冬に耐えたことを誇っているように見える。

7　叱られて涙拭へば雪明り

遠い昔、何か悪さをして、親から叱られ泣いた。くやしくて外へ出ようと、手で涙を拭ったら、窓の外がぼんやりと明るい。いつのまにか雪が降っていた。それは雪明りだった。

8　天守閣浮き立つやうに朝桜

宿の朝、遠くから見た弘前城は、本土最北端のため開花の遅い桜が丁度満開。朝陽に輝く満開の桜の軍団がまるで天守閣を持ち上げているかのように見え、感動した。

9　雲海の切れて渺渺北大地

はじめて雲海の切れ目から垣間見た北海道の大地の雄大な眺めは忘れがたい。機窓から見る雲海は壮大だが、その下に広がる北海道の大地は果てしなく雄大だった。

10　部屋中を夕焼けにしてギター弾く

私は学生時代から、クラシックギターを趣味としている。この日、窓から夕焼けを眺めているうちに詩情にかられ、窓を全開して、夕焼けの中でギターを弾いた。

遊び半分で東北大鬼城句会に入り、『櫻草』に投句するようになってから一八年。プロの俳人が主宰する弁護士会の句会でも鍛えられ、東京公証人会の会報の俳壇に近作を紹介するなど、俳句は余生の大事な生き甲斐の一つです。